
酔いどれ軍団安全祈願でタイムスリップ

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酔いどれ軍団安全祈願でタイムスリップ

【Nコード】

N1057Q

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

安全祈願のため神田明神を訪れた酔いどれ軍団。 井川と平将門の因縁で平安時代にタイムスリップ。

1・幸福の鈴の音

1・幸福の鈴の音

年が明けた1月の4日。 小林商事の仕事始め。 小林商事では毎年、仕事始めの日に商売繁盛と安全祈願で神田明神へ参拝に訪れることになっている。

良介は仕事始めだということもあり、いつもより少し早めに出社した。 事務所に入ると最初に佐々山知美に出会った。

「あけましておめでとうございます」知美は笑顔でお辞儀して良介に挨拶した。

年の初め。 真っ先に出会ったのが美人の佐々山知美だったので、今年は縁起がいいと良介は思った。

早めに来たはずが、良介が出社したときには既にほとんどの社員が席に着いていた。 良介は社長の志田から順番に新年のあいさつをして歩いた。

安全祈願は午後4時から。 それまでは通常業務だが、ほとんどの社員が出社するとすぐに年始あいさつに出かけて行った。

良介は暮れに納品した物件のデータをまとめ、収支報告書を作成していた。 社内には良介の他に総務の石山と須藤今日子、企画の佐々山知美が残っていなかった。

昼になると、石山がランチに行こうとみんなを誘った。 4人でそば屋に行くと、天ぷらとそばのセットを石山がご馳走してくれた。 やっぱリツイてるなあ…。 良介は改めてそう思った。

午後には、直接神田明神へ出向く社員を除いて、ほとんどの社員が戻ってきた。 総務の青田と工務の浅井は戻るとすぐに安全祈願

の段取りのために先に出かけて行つた。

午後3時。 集合時間の30分前ということもあり、社内にいる連中は一斉に出かけ始めた。 総務の石山だけは留守番のため、会社に残った。

参道が近くなると、既に参拝客の行列が通りにまであふれていた。制服の警官が何人も出て参拝客の誘導を行っていた。

良介たちは行列の脇をすり抜け、御社殿の前までたどり着いた。既に、直行組や協力業者の代表といった面々が来ており、新年のあいさつを交わしている。すると、いつの間にか近くに來た名取が良介に声をかけた。「あけましておめでとうございます」良介も挨拶を返して、しばらく雑談をしていた。

「ところで、日下部さん。 神田明神って何を祀つてあるんですか？」と名取。 良介が平将門だと答えようと思つた瞬間、背後から声がした。

「平将門だよ」井川だった。

「へー、井川さん詳しいんですね！」名取が感心している。 井川が得意万弁に続ける。

「将門様にはちよつとうるさいんだ」一瞬、なんだか訳ありのような表情になる。

そうこうしているうちに、浅井が手を上げて、参拝の順番が来たことを告げた。 良介たちは社長の志田を筆頭に御社殿へ入った。

同時に参拝する10社の代表者が最前列に並び、社員達はその後ろに控えた。

さすがに、この日は参拝する企業も立て込んでいるのだろう。いつもなら足がしびれてしまうほど長い祝詞があつという間に終わってしまった。とはいえ、どこをどう省略したのかなど、さっぱり分からなかった。

祝詞が終わり榊を奉納すると、二人の巫女が出てきて幸福の鈴の音を授けてくれる。 このとき「清らかな乙女による幸福の鈴の音

を……」との紹介があると、良介の後ろにいた名取が“ぷつ”と吹き出した。隣にいた井川が肘で名取の脇腹をつついて睨みつけた。
「バチが当たるぞ！」

「……。軽く頭をお下げ下さい」 その場にいる全員が頭を下げる。巫女が参拝客全員に鈴の音を振りかけるように鈴を鳴らす。
“シャリーン シャリーン”

毎年聞いている鈴の音だが、今年は特別に神秘的な音色に感じた。そんなことを思っていると、急に目まいがしてきた。同時に、まわりが真っ暗になった。最初、目を閉じているせいだと思っていたが、目を開けても本当に真っ暗だった。そして、闇の中に吸い込まれていくような感覚を覚えると、意識が遠くなっていった。

どのくらいの時間が過ぎたのか……。良介は体を揺さぶられているような感覚にふと我に返った。すると、井川の声がはっきりと聞こえてきた。

「おい、日下部よお。エライことになっちまったみたいだぞ」

良介の意識がはつきりした時、周りは真っ暗な闇の中だった。

良介の周りには何人かの人の気配がした。一人は井川に違いなかった。しばらくすると、だいぶ目が慣れてきた。

神田明神の御社殿にいたはずなのに、ここはどうやら別の場所らしい。良介は胡坐をかいて座ったままの状態にいる。そして、すぐ横で立ち上がって、茫然としている井川。他には、まだ座ったままの状態で意識が戻っていない様子の名取と青田。どうやら今ここにいるのは4人だけらしい。

他の連中は一体どこに行ってしまったのか……。それとも、逆に良介達4人だけが別の場所へ飛ばされてしまったのか……。じきに名取と青田も目を覚まし、辺りをキョロキョロ見まわし始めた。

「日下部さん？ どうなっちゃったんですか？ ここ、どこですか？」名取が聞いてくる。

「俺にも分からないよ。もしかしたら、巫女さんを笑ったバチが当たったのかもな」良介はそう言って立ち上がると、井川が見ている方に目をやった。

「マジっすか？」冷や汗をかく名取。遠くの方にかすかな明かりが見える。

「お前、超能力って信じるか？」井川が聞いてくる。

「どちらかというと、信じる方ですかねえ……」

「どうやら、お館様に呼ばれたらしい……」井川が神妙な面持ちで言う。

「お館様？」良介は首をかしげた。

名取と青田も井川のそばに来て遠くに見える明かりを眺めた。

その時、かすかに何かの音が聞こえてきた。何かが近づいてくるように、だんだんの大きくなってくる。馬の蹄の音のようだ。

しかも、1頭や2頭ではなさそうだ。

「まずいぞ！」井川はそういうと、良介達に伏せて隠れるように指示した。

その瞬間、良介たちの周りに“シュツ”という音がすりぬけたと思ったら、“ドスン”という音とともに、何本もの矢が地面を突き刺した。全員、体を小さく丸め、目を瞑って地面にひれ伏した。

しばらくして、恐る恐る顔を上げてみる。すると、何頭もの馬が良介達を囲んでいた。馬の背にまたがっているのは侍のような格好をした男たちだった。

2・俺は特別

2・俺は特別

映画の撮影でもやっているのだろうか…。それにしても、この地面に突き刺さっている矢は映画の小道具というには生々しい。命中していたら、間違いなく体を突き抜けていたに違いない。

井川は一人、侍の格好をした男達の方へ歩いて行った。男達は一斉に弓を引き井川に狙いを定める。井川は構わず進んでいくとリーダーだと思われる男の前で立ち止まった。

「お館様の命令か？」井川がそういうと、男は手をあげて部下達に構えた弓を下ろさせた。そして、馬から降りると井川の前にひざまずいた。

「失礼いたしました。数日前より現れた物の怪に良く似たいでたちをしていたものですから…。お館様がお待ちです」

「そうか。ならば、案内せい」井川が言くと男は部下に合図した。4人の部下達が馬を降り、井川の前まで馬を引いてきた。井川はそのうちの1頭に颯爽とまたがった。

良介達はあんぐりと口を開けてその様子を見ていた。

「井川部長って何者なんだ？」名取がつぶやく。青田は首を横に振るのが精いっぱい言葉も出ないようだった。

「お館様って誰だろう？ここは一体いつの時代なんだ」良介は頭の中を整理した。

これが夢でないとしたら…。あり得ないことだが、タイムスリップしたとしか考えられない。どんなに頼つぺたをつねつてもただ痛いだけだった。だとすればいつの時代にタイムスリップした

んだろう？ あの侍達の姿からして戦国時代よりはずっと前だろう。タイムスリップする前には神田明神にいた。そのことと関係があるとするば、もしかして…。

良介が考えていると、井川が手を振って合図した。

「お前達も早く乗れ。ついてくれば分かる」そう言ってリーダーの男と共に進んでいった。

「早く乗れって言ったって…。馬になんか乗ったことないしなあ」そう言いながらも名取は見よう見まねで颯爽と馬にまたがった…。

はずだった。しかし、前後逆にまたがってしまった。

「はい、はい。こんなところに来てまでコントのまねことはやめてくれよ。笑えないからな」青田は鼻で笑いながら自分も馬にまたがった。

「青田さんこそ、やめて下さいよ。マジで笑えませんから」名取に言われて青田は引きつった。名取同様、前後逆にまたがっていた。「あれっ？ おかしいな…」

「ふざけてないで行くぞ」良介は二人をたしなめ、馬を引いている男に合図した。

一団は遠くに見える明かりの方へ進んでいった。きっと、そこに村があるのだろう。しばらくすると、砦のような柵に囲まれた場所の入口らしい門のようなところにたどり着いた。門番が門を開けると一団は中へ入って行った。村は掘立小屋のような建物がいくつも並んでいる。やがて一際立派な建物の前に到着した。

侍の一同は馬を降り、再び井川にひざまずいた。良介達はおどししながら井川のそばへ集まった。

「部長、どうなってるんですか？」青田と名取が不安げに井川に聞く。

「心配するな。俺のそばにいれば安全だから」

良介達が到着すると、すぐにその建物から一人の男が出てきた。まるで、神田明神にいた神主のような格好をしている。

「この者たちなのか？」神主のような男は侍のリーダーに聞いた。
「左様にございます」リーダーは頷いた。

神主のような男は井川に近づくと、井川の顔をなめるように見た。
「うむ。なるほど」そう、頷くと、建物の中へ入るように告げた。
良介達は神主について、建物の中へ入って行った。そして、客間のような部屋に通されると、しばらく待つように告げられた。

待っていると、巫女の格好をした女性が酒と食べ物を持ってやってきた。女性の顔を見るなり名取が嘔き出した。再び井川に脇腹をつつかれた。良介と青田は名取が嘔き出したわけがすぐに分かった。酒を運んできた巫女の格好をした女性が、神田明神で幸福の鈴の音を授けてくれた女の子に瓜二つだったからだ。

巫女は名取の方を見てクスツと笑うと、「どうぞ、ごゆっくり」そう言って下がって行った。

「バカが！ さっきもバチが当たると言っただろう」井川が名取を睨みつけた。

「すいません…」

「まあいい。ちょうど良かった。さっきはお神酒を飲めなかったのが心残りだったからなあ」そう言って、井川は盃に酒を注いだ。
「こんな時に、そんなことを考えていたんですか」良介は呆れた。
「バーカ！ そんな時だって美味しい酒が飲めればOK牧場よ。いいから、お前達も飲め」

本来なら、今頃は参拝が終わって新年会を行っているところだ。

酒はともかく、良介達は腹が減っていたので巫女が持ってきた料理に手を伸ばした。

「なんだか、全然、味がしないなあ」料理を頼張りながらも名取が言う。

「そりゃあ、そうさ。この時代に調味料なんてものがあつたとは思えないからな」と青田。「味はしないけど体には良さそうだ」
青田はそう続けると、今度は盃に酒を注いだ。

「うん！ 酒は美味しいや」青田がそう言くと、名取も酒を注いで口

にした。

「本当だ。酒は美味しいですね」

酒を酌み交わしながら、まるで宴会のように盛り上がっている井川達を横目に、良介は最低限の腹ごしらえをただけで、酒はほとんど飲まなかった。

宴もたけなわ…。ではないが、1時間ほどすると、神主が「着替えるように」と服を持ってきた。4人は服を受け取ると着替え始めたが、名取は服の着方が分からず、ただ、布を巻きつけているような着こなしになっていた。

「なかなか、いい感じかな？」と、おどける名取。良介と青田はなんとなくではあるが、とりあえず、違和感なくその時代の正装だと思われるその服を着こなしした。

「あれっ！井川部長の服は一人だけ高そうなんですけど、どういうこと？」名取が目ざとく井川に食ってかかった。

「しょうがないだろう！俺は特別な」井川はニヤリと笑うが、その理由を語ろうとはしない。

着替え終わったのを見計らっていたかのように、神主がやって来て「これからお館様に会って頂きます」と告げた。井川は頷いて神主に従った。

「あのぉ…」名取が恐る恐る言う。「なんだ？」神主が睨みつける。

「財布を入れるポケットが無いんですけど」と、財布をかざす名取。「ぽ？ぽけつと？」神主が首をかしげる。すると、井川の平手が名取の頭を捉えた。

「そんなもの、ここじゃ用無しだからスーツのポケットにしまっておけ」

「はあ…。じゃあ、この服をしまっておくロッカーは？」名取がそう言った瞬間、井川のゲンコツが名取の顔面にヒットした。

3・影武者

3・影武者

井川を筆頭に金魚のフンのように神主の格好した男の後に着いて行く良介達。見事な日本庭園を囲むように外廊下を回って行く。見た目は涼しげな服も、幾重にも着重ねているためか意外と寒くはない。しばらく歩くと、大広間のような部屋にたどり着いた。部屋の奥には一段高くなったひな壇が設けられており、簾で覆われている。その簾の向こう側に、誰かがいるのがかすかに感じ取れる。

神主の格好をした男は簾の前にひざまずき、井川を隣に座らせると、良介達にはその後ろで控えるように指示した。

「お館様、お連れいたしました」神主の格好をした男は頭を畳にこすりつけるほどひれ伏して簾の奥の人物に申し出た。井川もそれに倣い、良介たちも頭を下げた。

「御苦労であった。皆のもの、面を上げるがいい。その方はもう下がっても良いぞ」簾の奥の男はそう言って、神主の格好をした男を下げると、簾を上げて自らの姿を良介達にさらした。良介達はその姿を見て絶句した。

良介達がこの世界に引き込まれた際に生じた時間のひずみは、神田明神の御社殿にいた他のメンバーをも巻き込んでいた。社長の志田は今日子、知美と共に、良介達より3年ほど早い時代に飛ばされていた。

志田達が飛ばされたのは、いくつかの村が点在する小高い山の中腹にある洞窟の中だった。二人の女の子を守るべき立場だった志

田は、一人で周辺の調査に出た。そこで、はるか昔にタイムスリップしたことに気が付いた。到底、信じがたいことであつたが、その事実を受け入れ、この時代で生きて行くためにどうすればいいのかを考えた。そして、志田はある結論にたどり着いた。

このまま、この時代で生きて行くのも悪くはないが、二人の女の子達のことを考えると、何が何でも元の世界に戻らなければならぬ。そこで、歴史を変える行為を行えば元の時代に強制排除されるはずだと考えたのだ。

志田は、ふもとの村で衣類や食料を調達すると、知美に神様っぽい衣装を作らせた。幸い、小林商事の歴女と呼ばれていた知美は衣類や食料からこの時代が平安時代であろうと予測していた。

志田は、自らを神と祭り上げ、近辺の村人たちの前で、現代の知識を武器にこの時代にはあり得ない文化を築いていった。

まずは、住居を現代風のものに立て替え、水道を引き畑や水田を整備した。看護師の資格を持つ今日子は、やはり病や疫病の予防、治療を行い、歴女知美の知識により、当時発生したであろう、戦による戦火や自然災害を事前に予言し志田に教えた。志田は巧みな話術を駆使し、次第にその地位を高めていった。そして、ついには朝廷にもその存在が知られるほどに至った。

こうして志田達は、当時にはあり得ない文化を築き上げていったが、一向に現代へ戻れそうな兆候は見られなかった。そして、歲月は流れ2年がたった。

業を煮やした志田は、現在の朝廷をひっくり返すことを考え、当時の常陸介の藤原維幾との接触を試みた。しかし、維幾は朝廷寄りの考えを持ち、志田の提案を受け入れはしなかった。志田は武力を持ってこれを制圧せんがために、兵力の強化を図り、近代的な兵法に基づく訓練を徹底するとともに、武器や道具を量産していた。そして、1年間で膨大な兵力を配下に置くと、密かに藤原氏討伐を企てていた。

その頃、不動倉を破つたために追捕令が出ていた常陸国の藤原玄

明を平将門が擁護し、兵を挙げた。将門の兵力は一千、それに対して国府軍は三千を超える兵力で将門軍を迎え撃った。いわゆる平将門の乱の発端だ。

志田は、国府軍の背後から奇襲をかけた。志田が作った矢を連射する武器と鉄の盾の前に、国府軍の兵はなすすべもなく総崩れになった。将門軍は右往左往する国府軍を一気に攻めて勝利を収めたのである。

この戦を機に、志田は将門と盟約を結び、京へ上り、朝廷を覆す計画を実行に移すことにした。

ところが、今のままでは歴史の大筋に変化は起きない。そこで、志田は将門を暗殺し、自ら京へ上ろうと画策した。命を狙われていることに気付いた将門は影武者を置くことを決断した。しかし、今まで抱えていた影武者は、先に流行した疫病で他界したばかりだった。その者に瓜二つの息子がいたが、まだ幼くとても影武者が務まるとは思えなかった。そこで、その者の祖先や子孫の中から最も自分に似ているものを呼び寄せることにした。

将門には特殊な能力があった。どんなに離れた場所でも、そこにいる人間の意識を通じてその場所を見ることができたり、念力で物を瞬間移動させたりといった超能力を生まれながらに持っていた。15歳の時、平安京へ出てからこの能力に目覚め、朝廷のために役立てようと当時軍事警察を管掌する検非違使の佐^{すけ}や尉^{じょう}への士官を望んだが認められず、故郷の下総佐倉を目指し、東へ下った。

将門は自分とそっくりな人間の念を探し当てた。「見つけたぞ」そして、より強い念を込めてその者を引き寄せた。念が強すぎたため、その者の周りにいた数人が一緒に引き寄せられた。将門は常に自分にそっくりな者にのみ念を送り続けた。一緒に引き寄せられた6人のうち、3人だけが途中で時空間を離れて引き離されていた。それが志田達だった。

将門は結果的に、影武者と共に、最大の敵を同時に呼び寄せたことになる。

簾の奥でお館様と呼ばれていた男は、なんと、井川にそっくりだったのだ。井川はニコリと笑ってその男に挨拶をした。

「御無沙汰をいたしました」井川の言葉に男は頷いて、笑みをうかべた。

「その方とは初めてであろう」男が言う。

「は！　しかし我が家門においては宿命でございます。例え、千年先の世界からでも将門さまのためなら喜んで馳せ参じます」そう言くと、井川は再び頭を下げた。

「それなら要件は言うまでもあるまいな」将門はそう言くと井川の額に手をかざし、念を送った。井川の頭の中には将門の命を狙う者の姿や兵力等の情報が送られてきた。情報を受け取ると、井川は苦笑いを浮かべ、つぶやいた。「ほう……。そういうことになっちゃったのね」

井川と良介達は将門との面会を終えると、別の屋敷へ移された。そこはまさに、将門の屋敷だった。井川を影武者に据えた将門は、密かに京へ向かって出立したのだ。

「部長の先祖って平将門だったんですか？」名取が声を震わせながら訊ねた。

「いや、将門ではなく、影武者の一族なんでしょう？」良介が聞きなおす。井川はうなずいて言った。

「さすが日下部だな。驚きついでもう一つ面白いことを教えてやろう。お館様の首を狙っているのは社長だよ」

良介達は井川が何を言っているのか想像もつかなかった。

4・再開

4・再開

志田は二千の兵を率いて、将門の屋敷へ進軍した。その知らせはすぐに井川のもとへ伝えられた。井川は将門から託された五百の兵に迎え撃つ準備を整えるよう命じると、名取を大将に据えた。「いいか、名取。俺は今から反乱軍の本陣に行ってくるから、前はあいつらと一緒に酒でも飲んでろ」そう言って井川は良介と青田を伴い、三人で屋敷を出て言った。名取は井川が指した方を向いた。タイムスリップして来た時に屋敷まで案内してくれた将軍と兵士たちが整列してこちらを見ていた。

名取は鎧を身につけ、大将らしい格好をしているが、どうしていか分からず、うるたえるばかりだった。見かねた将軍が何もしなくていいから悠然と座っていればいいと助言してくれた。どうやら、この将軍は全ての事情を知っているようだった。

「よし、じたばたしても仕方がない。部長……。いや、お館様の言った通り酒でも飲むか」名取は開き直り、見張りの兵を残し、他のすべての兵を集めて大宴会を始めた。

井川達はこの世界に来た時のスーツに着替え、志田の本陣へ堂々と乗り込んだ。

「部長、大丈夫ですか？　いくら向こうの大將が社長だと言っても、兵士達には僕らが社長の知り合いだと知らないんでしょう？　平民の格好ならともかく、こんな格好で出向いたりしたら捕まって殺されちゃいませんか？」

青田の心配はもつともだ。良介もそういう不安はあった。し

かし、今の井川はただの酔っ払いとは違うように思えた。

「いいんだよ。わざと捕まるんだから」井川は笑いながら言う。

「えー！　そ、そんな」青田の顔が青ざめる。

「まあ、そんなに心配するな。何か考えがあるんだろう」良介はそう言つて青田の肩にポンと手を置いた。

そうこうしているうちに、案の定、井川達は敵の兵士に見つかった。すぐに捕らえられ、本陣に連れて行かれた。

本陣では知美が食事の支度をしていた。知美は味噌や醤油、塩などの調味料を作り、それらを使った料理の方法をこの時代の兵士達に教えていた。志田の軍の兵士はこう言つた料理をたらふく食べていたので、他の軍の兵士達より、体力があつた。

その頃、本陣の外で怪しい輩を捉えたという情報が志田に伝えられていた。志田は、かねてより、自分たち以外にもこの時代に飛ばされたものがあると考えていた。兵士には志田が着ていたスーツを見せて、同じ服を着たものを見つけたら殺さずに連れてくるように言つてあつたのだ。

「志田様、例の服を着たものを連れてまいりました」兵士が伝えた。「ご苦労。すぐに会いに行こう」志田は、今日子を従えて捕虜に会うため席を立つた。

井川達は縛られることもなく、本陣内で待たされていた。

「間もなく志田様がお前達にお会いになる」兵士はそう言つて井川達にひざまずいて待つよう指示した。井川は言われた通りにひざまずいた。良介と青田もそれに倣つた。しばらくすると、ひときわ背の高い男が巫女を従えて現れた。青田は思わず目を丸くした。

「す、須藤さん？」青田は思わず、生唾を飲んだ。

井川は志田の顔を見ると、ニヤリと笑つた。「ずいぶん偉くなつたもんだな」

「なんだ、お前か」志田は井川の顔を見て張りつめていたものが和らぐのを感じた。

「後ろにいるのは日下部と青田か？」志田は良介達にも声を掛けた。「はい！ 社長。いや、し、志田様」青田は今までは打って変わって安堵の表情を浮かべた。

「皆さんお元気そうでなによりです」今日子も嬉しそうな顔をしている。

「やあ、キョンキョンもいたのか？」井川は今日子を抱きしめた。

「知美さんもいますよ」と今日子。

「こっちは、あと名取がいる。あいつは今、将門の屋敷で五百の兵の大將だ」

「まあ！」食事の支度を終えた知美がやって来た。

「まあいい。ちょうど飯の支度も出来たようだから一杯やりながらゆっくり話でもしようか」そう言って志田は宴席の準備をするよう兵士たちに命じた。

良介は志田の話を聞いて納得した。良介達が来たばかりのこの時代で志田はすでに、朝廷をも脅かすほどの勢力を持っている。

志田なら3年もあれば可能かもしれない。そう思った。それに、知美と今日子が少したくましく、しかしながら、より大人の女になったように感じたのにも納得した。

逆に志田たちは井川の話聞いて驚いた。自分が命を狙っていたのが井川だったと知った時には額から脂汗が流れ落ちた。そして、将門が既に京へ向かって経ったことを聞くと地団太を踏んで悔しかった。

「さあ、これからどうする？」人ごとのように井川が聞く。

「どうするもこうするも、早く元の時代に戻るにはどうすればいいんだ？ もう、こっちで三つも年を食っちゃったからなあ」と志田は腕組みをして呟く。

「部長はこうなることが分かっていたんじゃないですか？」と良介。

「まあな。子供の頃から聞かされていたからなあ。我が家の宿命らしい。最も子供の頃は何のことか分からず、ただ、チャンバラが好きだった俺はおとぎ話でも聞くように興味津々で聞いていたが、大きくなるにつれて、そんな話は忘れていたよ。ところが、この会社に入って、神田明神で祈願するようになって、急に妙な感覚が芽生えだしたんだ。じいちゃんやおやじが話していたことはまんざらデタラメではないと思うようになった。そして、今日はなんとなく『覚悟しなきゃならない時が来たかな』なんて思っていたところでこうなった。」井川は無表情で淡々と話した。

「それじゃあ、どうすれば元に戻るのか知っているのか？」志田が詰め寄るが、井川は首を横に振るだけだった。

「しかし、お前も良くやるよなあ。たった3年で天下をひっくり返そうかというところまで上り詰めるとはな。こんな話テレビだけの話かと思っていたけど、やりやあ出来るんだな。その調子で、会社ももつと大きくしてもらいたいもんだ。」そして、井川は志田に皮肉を言った。

「それじゃあ、私たちがここへやってきたのは、平将門が井川部署を影武者として引き寄せたからなんですよね？」知美が聞いた。

井川はうなずいた。知美はさらに続けた。

「だったら、将門が死ねばその神通力も消えて私たちは元の時代に戻るんじゃないかしら」知美の言葉に青田は安堵の表情を浮かべた。ということは、何もしなくても将門はこの反乱で首を着られることになるからだ。

「それはどうか？」井川が反論した。

「どういうことですか？」良介が訊ねた。

「歴史の上ではそうなるはずだったが、社長が余計なことをしてくれたおかげで、将門は密かに京へ向かった」井川がそう言うと、皆納得した。

「だったら、やっぱり将門の首を取るしかないのか……」志田は立ち上がり、将門が向かった西の空を見上げた。

「無理だな。将門がどのルートで京へ向かったのか分からないし、車も携帯も使えないこの時代で将門を見つけるのは不可能だ。それに、俺のカンが当たっていたら、付属で付いてきたお前らは関東から出られない。」そう言っただけで井川は志田の横に並んで同じように西の空を恨めしそうに見上げた。

「結界が引かれているんですね」知美が言った。井川がうなずく。青田は希望が無くなったと思い、その場にうなだれた。

しばらくの間、無言の時間が続いた。良介は一人残して着た名取のことを考えていた。

「あっ！」良介が急に大声を出した。

「どうした？」志田と井川が振り向いた。

「名取ですよ！ あいつが切り札になりますよ」良介は微笑んだ。何か思いついたようだ。

5・名取大将

5・名取大将

良介は思い出していた。 将門が名取を大将に任命した時のことだ…。

将門は井川に影武者としての任務を託すと、護衛兵を井川の傍に置いて行くと言った。 井川は自分の部下である名取を兵士たちの頭に置くことを条件にあげた。 将門はしばらく名取の様子を見てニヤリと笑い、それを承諾した。

「名取とやら、ここへ来るが良い。 今からその方を護衛兵の大将に任ずる」 将門は名取を見つめた。 そして、さらに続けた。「護衛兵の大将になったからには、いつ何時でも主君に危機が迫らば、即座に駆けつけ、命を賭して守らねばならん。 その方にその覚悟はあるか？」 そう言うと、更に鬼気迫る形相で名取を見た。

名取は将門が言っていることの意味を深く考えもせず、“大将”の言葉に有頂天になっていた。 そして、井川の方をチラッと見た。 井川が頷いたのを確認すると、将門に向きなおった。

「仰せの通りにいたします」 名取は、時代劇で見たイメージを思い浮かべながら将門にひざまずいて忠誠を誓った。

「その言葉、忘れるでないぞ」 将門はそう言うと言取に念を吹き込んだ。 すると、名取の体が一瞬、黄金の光に包まれた。

将門はこうして名取を大将に任命すると、井川に合図を送った。 『あとは頼んだ』 それを受けて井川はウイंकをして返した。

将門は井川の奇妙なしぐさに首をかしげて苦笑いをしながら踵を返した。 そして、部屋を出る間際に名取を見て一瞬だけ意味ありげな笑みを浮かべた。 良介は将門のこの表情を見逃さなかった。

井川の条件だとはいえ、将門が自ら大将に任命したということは、配下の兵士達にとって名取は将門同様の存在と言えた。将門からの勅命がない限り、名取の命令が絶対なのだ。

将門の護衛兵は将門が最も信頼を置く兵士達でもある。本来なら、例え、密かに京へ向かうとしても、護衛兵を伴うのが道理である。だが、影武者を立てて敵を欺くためには、影武者のそばに護衛兵がいなければ疑われる。将門の護衛兵は敵方にも顔を知られているので代替えは通用しない。敵を欺くにはこうするしかなかったのだ。

良介達がこの時代へ引き込まれた理由は将門が影武者として井川を呼び寄せたことだ。井川は将門が行く所ならどこも付いて行くことができるが、井川以外の者たちは、いわば、この時代の異物であるため、結果により移動範囲が制限されているのだ。したがって、井川以外は関東を出ることができないのだ。

しかし、将門は万が一のことを考え、いつでも護衛兵を動かせるようにしておきたかった。そこで、名取の結界を解いて、いつでも護衛兵と共に京へ移動できるようにしたのだった。

良介の説明を聞いた井川と志田は改めて作戦を練り始めた。

「まず、俺たちは同盟を結んで、京へ向かうふりをして将門を追う」と井川。

「そして、関東を出る前に将門に追いついたら俺の軍で将門を討つ。志田が続ける。」

「間に合わなければ、部長と名取で追いかける」と良介。

「将門の護衛兵には用心が必要だろう」志田は腕を組んで井川を見る。

「ああ！ 將軍の一人は將門からすべての事情を聞かされているよ
うだからな。 だが、將軍一人じゃ戦には勝てない」 頷きながら井
川。

「そうか！ それで、名取に兵士と酒を飲むように言っ たんですね」
良介が指を鳴らした。

「そういうことだ。 実際に走り回る兵隊に信頼されれば、ある程
度の動きは封じることができるさ。 それでなくとも、あいつがあ
の軍の“ 大将” なんだからな」 井川は椅子に腰かけ、陶器の器に注
がれた酒を一杯口に運んだ。 「なんだ？ この酒は？」

「どうだ？ 美味いだろう？ 三年の間に、今… いや、俺たちの
時代に近い味の酒を造ったんだ」 志田が自慢げに言う。

「それより、その後だ」 志田が話を進める。 「將門を見つけられ
なかつたらどうする？」

「関東から出たら、先廻りして京で迎え撃つ。 俺が先に朝廷をだ
まして將門を謀反人に仕立ててやるよ」 自信たつぷりに井川が笑う。

その頃、將門の屋敷では名取が兵士たちにせがまれて舞を披露し
ていた。 “ 舞” といっても、その時代の舞ではなく名取が得意な
ブレイクダンスだった。 兵士たちは名取の激しい動きにヤンヤヤ
ンヤの喝采を浴びせていた。

「大將殿、そんな激しい舞は初めて見ましたぞ。 まさに、これか
ら戦に向かうにふさわしい舞でござる」 將軍の一人、嘉政が名取に
近づき絶賛した。

「私にもその舞を教えては下さらぬか？」 將軍がそう言うと、他の
兵士たちもこぞって舞を習おうと、名取の周りに集まった。 気を
良くした名取は兵士たちにブレイクダンスを教え始めた。 そんな
様子を見ているうちに、將門の腹心の將軍である成禎も次第に名取
の人柄にひかれていった。

宴は一晩中、盛り上がり、次第に東の空が明るくなってきた。
すると、見張りの兵から報告が入った。 「お館様がお戻りになる

ぞー！」

その声を聞き、名取達は戻ってくる井川達を出迎えようと、兵を引き連れ城壁に上った。すると、井川は白旗をあげた志田の兵二千を引き連れ、こちらに迫ってくる。それを見た護衛兵たちは敵が攻めて来たと思いこみ、慌て始めた。どうやら、この時代は白旗が降参の証しだと認識されていなかったようだ。名取は、白旗を見て、敵軍が降参して配下に下ったことを味方の兵士達に伝え、城門を開けさせた。

志田が、場内に入ってくると、名取は城壁をかけ下り、志田に挨拶をした。「社長、お元気でしたか？」すると、名取に倣い、五百人の護衛兵たちが一斉に志田にひざまずいた。

「ほーう！ さすが名取だ。一晩で兵隊の心をつかんだようだ」志田が言くと、井川は「俺が見込んだんだ。当たり前よ」と笑った。

志田に続いて、良介や青田、そして、知美と今日子の姿を見ると、名取はさらにテンションが高くなった。

「名取君、格好いいね」知美と今日子にそう言われると、すぐに兵士に命じて、知美達の荷物を持たせ、部屋へ案内させた。

成禎將軍は名取に尋ねた。「あれは反乱軍の志田とその兵士たちではござらぬか？ お館様はいつの間にあ奴らを降伏させたのでござろうか？」

「あの二人は昔から友達だったんだ」名取は笑って答えた。そんなことより、憧れの知美に会えた喜びで名取は頭がいっぱいだった。

6・追跡開始

6・追跡開始

井川は将門の兵と志田の兵を集めて同盟を祝う宴をも要した。その一方で名取に命じ、成禎を密かに呼び寄せた。

成禎が井川の部屋を訪れると、そこには志田の姿もあった。成禎は警戒心を強めた。

「將軍、よく来てくれた。この男のことは知っているな？」井川が志田の方を見た。

成禎も志田を見て頷いた。

「井川殿はどうやってこの者を味方につけられたかお聞かせ下され」と成禎。

「いいだろ。取り合えず、座りたまえ」井川は成禎のために椅子を引いた。成禎が椅子の座ると井川と志田も席に着いた。

「將軍、お前さんはお館様の特別な力のことを知っているな？」井川は単刀直入に切り出した。成禎は少し驚いた顔をしたが頷いた。「薄々は感じております」

井川は、自分たちがこの時代へやってきた経緯や志田がどうして将門を狙っていたのかを説明した。全ての話を聞いた成禎は意外と冷静に受け止めていた。その様子を見て井川は確信した。

「つまり、我々はただ自分たちの時代へ戻りたいだけなんだ。お館様はいずれ首をはねられる。これはもう変えることができない歴史上の事実なんだ。このままお館様にお仕えしていても、捕らえられれば將軍も一緒に首をはねられるだけだ。俺が何を言いたいかわかるかね？」井川はそう言う酒を一杯飲みほした。そして、成禎にも勧めた。成禎は酒を一口飲むと表情を変えた。

「こ、この酒は…」井川が成禎に勧めたのは志田が作った現代の

物に近い酒だった。

「口に合わなかったかな？」志田が訊ねた。成禎は首を横に振った。

「こんな美味しい酒は初めてでござる」成禎がそのまま一気に飲み干すと、井川がすぐに酒を注いだ。

「私はどうすればいいのですか？」

その頃、宴の席では名取が護衛兵たちと“舞”を志田の兵士たちに披露していた。名取は知美にいいところを見せようと張り切って踊った。

「名取君、格好いいわよ」そう言って知美が拍手をしてくれている。名取は益々調子づき、さらに激しく回転を加えた。既に相当量の酒を飲んでいた名取は踊っている最中に意識が飛んでその場に倒れ込んだ…。というより寝転がった。

「大将！　どうなされましたか？」護衛兵たちが名取に駆け寄った。

「大丈夫さ。酔っ払っただけだよ。しばらく寝かせておけばいいさ」良介がそう言っても兵士たちは心配して名取を部屋へ運んで行った。

その直後に、井川が宴の席にやってきた。知美と今日子に部屋に食べ物運ぶよう頼むと、良介には早朝にここを発つ旨伝え、準備をしておくように指示した。

話が終わると、志田は成禎に手を差し伸べた。成禎はそれが何を意味するのか分からない様子だった。そこへ戻ってきた井川が成禎の手を取って志田と悪所をさせた。「成禎殿は握手を知らないらしい」

「当たり前です。この時代の日本にそういう習慣はありませんから」そう言っただけで知美が部屋に入ってきた。その手に持たれた膳には現代の食べ物に近い料理が並べられていた。成禎は見たこと

もない料理に目を細めた。「これはまた何とも美味そうな料理でござるな！それに、井川殿たちの時代の女子は皆このように美しいのでござるか？」成禎は、そう言っただけ知美をじっと見つめている。「英雄色を好むと言うが、將軍も例外ではないようだな」井川が笑いながら言った。

「冷やかさないでくださいよ」知美はそう言っただけ井川の足を踏み付けた。

そんな様子を見ていた成禎は呆氣にとられポカンとしている。

この時代では女性が目上の男性に対して手をあげることなど考えられないのだ。

知美は部屋を出る際、成禎の手を取っただけ言っただけ。

「將軍、未来では実力があれば女子でも一国の主になれるんですよ。

女子がきれいなのはエステのおかげ。といっても分からないでしょうけど。この時代にはありませんから。とにかく名取君をよろしくお願いしますね」そして、ウインクして部屋を出ていった。今日子もお辞儀をして知美に続いた。

成禎は顔を赤くしてその場で固まったように立ちつくしている。

そんな成禎を井川がからかう。「將軍は知美嬢のことを好きになっただけだな」

「冗談はそのくらいにして、早速、明日の朝出発しよう。計画通り俺の軍が先に行く」志田はそう言っただけ席を立つと部屋を出て行った。

井川は成禎に酒を進めた。成禎も酒には目がないと見えて、ためらうことなく盃を差し出した。

「追い付けますかな」成禎が一瞬真顔に戻る。

「あいつは俺達より3年早くこの時代に来ているんだ。その3年間で民に神と崇められるようになった。それがどういふことか分かるかね？將軍」井川の問いに成禎は首をひねった。井川は続けた。

「あいつが一言発すれば一瞬で千里先まで伝わっちゃう。だから、

将門の居場所なんてすぐに分かるさ」そう言つて井川は盃に酒を注ぎ足した。

「なるほど、確かに！ それにしてもこの肉の味は格別でござるな」
知美が作つた醤油風ソースで味付けした牛肉のステーキを頼張りながら成禎は衣の帯を緩めた。

その頃将門は、今でいう東京の多摩地方の辺りを進んでいた。

その日は同行した兵士の家に泊まった。当然、自分が将門だということは隠していた。しかし、兵士は家族にこつそり自慢話をし、将門の共で京へ上る途中であることを喋ってしまった。

このことはすぐに志田のもとへ伝えられた。志田はその方面に地理に詳しい兵士を先鋒舞台の隊長に任命し、日が昇る前に二千の兵を引き連れて将門を追つて陣を發つた。

後から追つてくる護衛兵と常に連絡を取れるように通信兵を絶えず行き来させる手段を講じて二つの軍がはぐれることのないよう井川と打合せをしていた。

そして、夜明けとともに名取大將率いる将門の護衛兵五百が出發しようとしている。

「名取君、何か格好良くないなあ」知美が言う。

「仕方ないですよ。だって馬に乗れないんですから」数人の兵士に抱えられた輿の上に鎮座した名取が申し訳なさそうに言った。

「いいんだ！ そんなこと気にするな」後ろの方からそう叫んだのは将門の馬車に乗った井川だった。隣にはちやっかり今日子に乗せている。

「知美さんはどこで乗馬を覚えたんですか？」颯爽と馬を乗りこなす知美を見て名取が聞いた。

「ここで。何しろ3年もいるんだから。遊ぶところもないし、暇つぶしで乗ってるうちにコツを覚えたわ」そう言つて知美は馬に気合を付けると、最前列を進む良介たちの方へ走って行った。

「知美さんはやっぱり格好いいなあ」そう言っただけのため息をついたのは名取の隣を同じように輿に乗せられてついて行く青田だった。

「ぶっ！」名取が思わず嘖き出すと、青田は名取に向かって持っていった握り飯を投げつけた。

「あっ！」青田は思わず叫んだが後の祭り。握り飯をキャッチした名取は即口の中に詰め込んだ。

こんな大将で護衛兵たちを指揮出来るのだろうか……。そんな風に気をもんでいる良介をよそに、鼻歌交じりで旅行気分の井川はすでに酒を飲み始めていた。

7・歴史の壁

7・歴史の壁

将門を追跡している井川は確信していた。将門は都へは行けないと。その根拠は“歴史の壁”だ。

本来なら、この時期、将門は藤原秀郷と平貞盛の大軍と戦っているはずで、翌月2月には2月1日には秀郷軍に惨敗、13日には秀郷・貞盛により本拠地は焼き払われ、翌14日、幸島郡北山で戦死しているのだ。もっとも、この知識は“歴女”知美からの受け売りなのだが、いずれにしても将門の死期は近い。そう考えると、このまますんなりと、将門が都へ行けるとは思わなかった。

井川と志田の軍勢が西へ移動したという情報は、すぐに藤原秀郷にも伝わった。年が明けてから優勢に戦を進めて来た秀郷はこの機を逃すまいと、貞盛と共に将門の軍勢に迫ろうとしていた。

「お館様、大変なことになりました」 志田の偵察部隊から緊急の連絡が入った。

「なんで？ どうした？ 将門を見つけたのか？」 井川は湯呑を片手に赤い顔をして偵察兵に言葉を返した。

「藤原秀郷の軍勢が迫っております」 偵察兵が声を荒げた。井川は焦った。自分は意気揚々と将門追撃に出ているのだが、周囲から見れば影武者の井川が将門なのだ。その将門が動いたとなれば敵方は当然、迎え撃ちに出る。

「しまった！ すっかり忘れてた」 井川は少し考えると、知美を呼んだ。

「佐々山さん、このタイミングで将門に援軍を送ってくれそうなのじゃないのか？」

「どうかしたんですか…」 知美は不思議そうな顔をして訊ねたが、井川の顔が青ざめているのを見て今の事態を察した。

「もしかして、敵に見つかったんですか？」 知美の言葉に井川は頷いた。

「そうですね…」 知美はしばらく考えていたが、思い当らなかった。この時期、劣勢だった将門の軍は、どこの部隊も疲弊していて、今、ここにいる兵以外は役に立つとは思えなかった。しかし、史実が本当なら、将門は領民に慕われていた。知美が志田と過ごした3年間もどこの民も将門を新皇として崇めていた。だが、今では志田を神と崇める民は志田の一言で新皇将門の命も躊躇せず、取りに行くだろう。

「この辺りは割と大きな集落が点在しているようです。領民を味方につけましょう。藤原秀郷も民を相手に戦えないでしょうから」

そうは言ったものの、どうやって領民を味方につけるのかは知美も考えていなかった。

「なるほど！ そいつはいい。成禎將軍を呼んでくれ」 知美に告げると、進軍を止めるよう指示を出した。

井川は、いちばん近い集落のはずれに陣営を構え、領民たちを招いて宴を開いた。一方で志田に使いを出して、秀郷・貞盛の背後に回るよう指示した。

宴の席で井川は、遠征のために用意した現代風の酒や料理を惜しげもなく振舞った。そして、領民たちに自分の護衛兵に志願すれば生涯生活に困らないだけの富を与えると約束をしたのだ。そうやって、行く先々の領民を抱きかかえ、またたく間に大軍を作り上げた。

将門軍の兵士の数に恐れをなした秀郷・貞盛は体勢を立て直すために一時兵を引き、距離を取りながら様子をつかがうことにした。ところが、近代の武器を駆使する志田の精鋭部隊に奇襲されると兵たちは散り散りに逃げ去ってしまった。秀郷は茫然と立ち尽く

すしかなかった。

「クソッ！ 兵士を集めて体制を整えるのに何日かかる…」 秀郷は側近の部下に向かってつぶやいた。

「しかし、あの奇襲部隊、妙な武器を使う…」 そして、貞盛は得体のしれない恐怖を感じていた。

井川の陣では本体が戦わずして、敵を退けたことで士気が高まっていた。 兵士たちも久々の勝利に酔っていた。

「これで少しは時間が稼げるな」 井川はその後も領民から護衛兵を募りながら将門を追って進軍した。

その頃将門は山林の中を抜ける街道を進んでいた。 ところが、途中で道が倒木にさえぎられて進むことができなくなっていたのだ。「お館様、どうしましょう？ これでは先に進めません」 同行している内官が途方に暮れた。

廻り道をすれば10日は余計にかかることになる。 将門はそんなにゆっくり進むわけにはいかなかった。 なぜなら、井川が近くに迫っていることを感じ取っていたからだ。 つまり、自分が狙われていることを察していた。 将門にしてみれば予想外のことだった。 しかも、井川と一緒に最大の敵である藤原秀郷と平貞盛までが近付いている。

将門は内官たちに命じた。 「下がっている」 そして、倒木に向かつて右手をかざした。 すると、倒木がゆっくりと中に浮かび始めた。 内官たちが目を丸くして驚いていると、倒木は左右に蹴散らされ、あっという間に道が開けた。

「急ぐぞ。 何としてもあのものより先に都へ着かねばならぬ」 将門は二人の内官を引き連れ先を急いだ。

将門が山道に入ったという情報は志田のもとへ伝わっていた。

「さすがだな。俺たちが真っ直ぐ自分の後を追ってくることに気付いたな」 志田はかすかに笑みを浮かべた。そこにはサラリーマン社長の面影はみじんもなかった。

「社長様、願ってもないチャンスですね」 志田の側近がつぶやいた。 長く志田と一緒にいるので、“チャンス”などの言葉を使いこなす。そして、知美と今日子が読んでいたように志田のことを“社長”と呼ぶ。

「お前もそう思うか？ ならばどうする？」 志田は嬉しそうにその側近を見た。

「はっ！ 私なら精鋭3人お貸しいただければ、生け捕りにしてまいります」

「ほう、将門は手ごわいぞ。超能力を使うからな。それでも出来るかな？」

「はい！ 必ずや！」

「分かった。3人選んで連れて行け」 志田が許可すると、側近は深く礼をし、下がって行った。

井川は相変わらず、領民を吸収しながら志田に続いていた。しかし、一つだけ問題が生じていた。

「あとどれくらいある？」 井川が神妙な面持ちで知美に尋ねた。

「それが最後の1本ですよ」 知美が非情な言葉を平然と言う。

志田が作り置いていた酒がもうなくなつたのだ。 井川にしてみれば、敵に襲われることより深刻な問題だった。

8・戻れるといいですね

8・戻れるといいですね

将門にしてみれば、まったくの計算外だった。それは、井川と共に引き寄せてしまった志田の存在だった。しかも、志田がこっちへやって来たのが三年前の時代だったこと。

将門の知らない間に、強大な勢力を得た志田が一時は味方についていたのも歴史を変えて元の時代に戻るための策略だった。しかし、結果的には大きな変化をもたらすには至らなかったがために、今の事態を予測することができなかった…。

普通なら、その時代にはない武器や戦術を駆使して戦う、志田を警戒して当然なのだが、飛ぶ鳥をも落とすほどの勢いがあった当時は志田の軍といえども、裏切れば一瞬にして葬り去ることもたやすいとうぬぼれていた。

その志田が、今では自分を脅かす一番の敵に変わってしまったのだ。その志田がまさか井川と共に自分自身で呼び寄せた者とはつゆほども考えていなかった。

考えてみれば不思議な話だ。志田に追い詰められて影武者を呼び寄せた。それによって志田が現れた。影武者を呼び寄せなければ志田が現れることもなかった…。歴史とは数奇な縁の上に成り立っているものなのだろう。

「運命を変えることは無理なのか…」 将門はぼつりとつぶやいた。「運命を変えようとは…」 内官の一人が不思議そうに将門を見た。

「いや、何でもない。先を急ごう」 将門はそう言うと足を速めた。

今とは比べ物にならないほど澄み渡った夜空の星を眺めていた志田は、付の中から舞い降りてくる一羽の鳩の姿を捉えた。

志田が差し向けた偵察兵は既に将門の姿を確認していた。偵察兵はふところに忍ばせていた鳩の足に文をくりつけると、そつと空に放った。伝書鳩を使った連絡手段も志田が用いた策だった。

鳩は志田のそばに舞い降りると、志田がばらまいていた米粒を食べ始めた。志田はある程度食べさせてから鳩を抱き寄せ、足に結び付けられた文を外した。

『十里先獲物確認』 文にはそう書かれていた。志田はニヤリと笑い、全兵士に合図を送った。

井川は最後の酒を一気に煽った。名取と青田は「もったいない」とため息をついた。

「何を言ってるんだ！ こんなもんいつかはなくなるんだ。チビチビやってても酒の味が薄れるだけだ。あとはこいつで十分だ」そう言って、道中で集めた護衛兵が持ち寄った酒の瓶を指した。

「まあ、確かに部長にかかれば酔えれば何でもいいんだろうけど……」名取は口惜しそうにうなだれた。

良介と知美は合流した兵士たちに武器の材料を集めさせた。志田の兵士が使っていた武器を見本に同じ武器を作るためだ。今でいうボウガンのような武器は弓を引いたことのない農民にも簡単に矢を放てるような工夫がされていた。

「さすが社長だな。学生の時にアーチェリーをやっていたんだっただよな」良介は志田が作った武器を見ながら感心した。

「あら、そうじゃないわ。社長がやっていたのはサッカーよ」と知美。

「あれっ？ おかしいな。誰かにそんな話を聞いた覚えがあるんだけどなあ」

「それは多分、わたしが弓道をやっていて、最近アーチェリーを習い始めたってという話を社長がしたんじゃないかしら」照れくさそ

うに知美が言う。

「えっ？ 誰だって？」 良介は思わず聞き返した。

「高校生の時は弓道部だったんですよ、私」 知美はそう言つと、そばに置いてあつた弓を掴むと弦に矢を掛け思いつき引つ張り良介の方に向いた。

「ちょ、ちよつと待ってくれ」 良介がよける間もなく知美は矢を放つた。矢が良介の顔をかすめると、目を引きつらせて尻もちをついた。矢は良介の後方の木を這つていた蛇に命中していた。

「三年生の頃にはインターハイで三位になったこともあるんですよ」 そう言つて知美は尻もちをついた良介に右手を差し出した。

十里あつた距離を志田は一晩で一氣に詰めた。 将門は既に甲斐の国に差し掛かるうとしていた。

「どうやら間に合つたな」 志田は携帯用の双眼鏡を取り出し、将門の姿を観察した。

双眼鏡は井川と良介たちが志田の陣を訪れた時、たまたま良介が持っていたものを借りていた。 良介は昼間、年始あいさつで中山の顧客を訪れた際、ちゃっかり競馬場へ足を運んでいた。 それを知っていた志田は良介に馬券を頼んでいた。

志田は双眼鏡をしまつと、財布からくたびれた馬券を取り出し、しみじみと眺めながら苦笑いした。

「このままじゃあ、これもただの紙くずだな」 そうは言つたものの、馬券は再び大事そうに財布に戻した。 そして兵士のもとへ戻ると、将門を捉えるための指示を出した。

良介と知美は集まつた材料を確認して頷いた。

「何とか使えそうだな」 良介が言つと知美もニツコリ笑つた。

「あとは私が見ておきますから日下部さんはみんなのところへ戻つてもいいですよ」 そう言つて知美は大工の棟梁のもとへ歩き出した。 本陣に戻つた良介は名取と青田の横に座つた。 名取が馬券を取

り出してしみじみと眺めていた。

「今日の金杯、どうなったかなあ……」

「なんだよ、仕事もしないで競馬場に行っていたのか？」青田が咎めるように言う。

「違いますよ！ 新宿のお客さんのところへ行つた帰りに場外馬券場で買ったんですよ」良介は名取の馬券を覗きこんだ。

「それはハズレだな」それを聞いた名取は「マジっすか？」と聞き返した。

「ああ！ 1着が1番で2着が4番。ちなみに3着は16番だった」

「1・4・16ですか？ けっこう付いたんじゃないですか？ 日下部さんも買ったんですか？」

「ああ。馬連でも3千5百円付いた」良介は、自分の馬券を取り出して名取に見せた。もちろん、当たつてはいなかった。

「社長は馬連を取ったよ。しかも一万」

「ということは、35万？ それじゃあ、今日は社長のおごりで一杯イけますね」

「そうだな」

「戻れるといいですね」青田がしみじみと言った。

良介は消えそうになった焚火に薪を放った。井川は相変わらず、今日子を隣に置いて飲んだくれていた。

その頃、志田の兵士たちは密かに将門たちを取り囲んでいた。

9・将門絶命

9・将門絶命

将門は何とか甲斐の国を抜け、信濃に入った。甲斐を抜けたということは、結界の外に出たということだ。井川や志田はこれ以上追って来ることはできない。しかし、将門は気付いていた。

既に、志田の兵士たちが周りを取り囲んでいることに。もともとこの世界の住人である彼らには結界の効力はない。

「ここまでか…」 将門は足を止めると、内官たちに今夜休むのに適当な祠かほら穴が近くにないか探すように指示すると、その場に腰を下ろした。

志田の追跡部隊は甲斐と信濃の国境に陣を張っていた。先鋒部隊が既に将門を取り囲んだという情報は既に志田のもとへ届いていた。

「ここから先へ行けないのがもどかしい…」 志田は星を見上げて呟いた。

「志田様…」 側近の一人が志田に近づいてきた。

「どうした？」 志田は側近に目を向けた。

「井川様の陣営に見慣れぬ軍が近付いております」

「どこの軍が分からないのか？」

「おそらく…」

史実では将門討伐のため征夷大將軍に任じられた藤原忠文が討伐軍長官として出立したのがこの年の1月中旬とされている。

しかし、今、井川達の陣営に迫っている軍は紛れもなく忠文の討伐軍に違いなかった。知らせを受けた井川は良介に命じて態勢を

整えさせた。

「やっぱり歴史が動いているわ…」 知美は良介の隣でそう呟いた。

「確か、今日は1月20日だね？ 忠文が征夷大將軍に任命されたのは1月9日でしょう？ 征夷大將軍に任命された忠文はそのま家にも帰らず、討伐軍を進軍させたんだよね…」 神田明神を訪れた時、たまたま平将門の本を読んでいた良介は知美に訊ねた。

「…10日で京都からここまで来るのは不可能だから、忠文はもっと早くに京都を出たことになる」

「そうですね。 たぶん、井川部長が将門を追って兵を動かしたことで、都に将門が反乱を起こしたと伝わったのかもしれませんが」

「でも、実際は忠文は将門とは戦っていないよね」

「はい。 忠文が関東に到着する前に将門は貞盛・秀郷・為憲の連合軍に討たれたことになっています」

「それが2月の半ば頃だったよね？」

「はい。 2月14日です」

「えっ？ バレンタインデー？」

「そうですね。 先輩、今年は期待していますよ」

「うーん、それまでに戻ればいいけど…。 この時代じゃあ、チヨコレートはあげられないもんね」

将門は内官が見つけた古い神社の境内にある今は使われていない小さな社務所にいた。 既に社務所の周りには志田の先鋒部隊に加えて、300の精鋭部隊が取り囲んでいた。

将門は既にそのことに気付いていた。 これまで将門に同行してきた二人の内官の命だけは救ってやりたいと思っていたが、もはやアリ一匹這い出る隙間もなかった。

将門は覚悟を決めて内官に事の成り行きを説明した。

「お前たちこれまでよく尽くしてくれた。 頭のいいお前たちのことだから既に察して入ると思うが、志田の兵が追手として我らに迫っており。 既にこの社務所はヤツらに取り囲まれているようだ…」

将門の言葉に内官の一人がそつと外の様子をうかがった。将門の言葉の通り、社務所の外は無数の兵士であふれていた。

「…もはやわしもこれまでのようだ。お前たちには何の罪もないがわしと共に冥土へ旅立つてはくれぬか？」

将門の言葉に二人の内官は涙をこらえ、頷いた。

「私たちが今生きていられるのもすべてお館様のおかげ。冥土でもどこへでも喜んでお供させていただきます」そう言うと、二人の内官は将門の前で切腹の用意を始めた。

井川は、自ら馬にまたがり、忠文の軍と対峙していた。その傍らには名取と成禎将軍が控えていた。

東の空が明るくなつて来たのを合図に忠文の軍が一気に進軍してきた。井川は護衛兵たちに号令を発し、陣営を固めた。そして成禎将軍に目配せをすると、成禎将軍は頷き先陣を切つて陣を出て行った。

将門が潜む社務所の周りは志田の兵たちが少しずつ間合いを詰め始めていた。

将門は切腹した内官たちを介錯すると、自ら社務所に火を放った。「志田よ、お前さえいなければ…。しかし、これも運命というもの。歴史とはこれほどまでにこのわしを認めてはくれぬのか…。だが、この首だけは渡すわけにはいかんぞ」

将門の怒りともいえる炎は一気に社務所を業火で包み込んだ。すぐそばまで来ていた志田の兵は突然の炎に思わずのけぞり後ずさりした。あまりに火の回りが早いので消火のすべもなく、ただ見守るしかなかった。

成禎将軍は忠文の兵士を一人で百は切り捨てた。しかし、既に体力の限界が過ぎているのは誰の目にも明らかだった。そんな将軍の姿を目の当たりにした名取はもはやいてもたってもい

られず、そばにいた護衛兵から馬を奪うときこちなく跨り戦場へ飛び出していった。

「お、おい名取、早まるな。こんなところで命を落としたら元の時代に戻れなくなるぞ」 青田が叫んでも、名取は止まらなかった。「友達が死にそうなのに、放っておけるかよ」

この世のものとは思えに業火の中で、将門は炎に包まれ、仁王立ちしていた。そして、肉が焼かれ体中の水分が水蒸気に代わり、骨が溶けるまで目を見開き志田がいる甲斐の方角を見つめたまま、絶命するまで、念を込めて魂の終焉を見届けた。

名取は成禎將軍のそばまで近づくと勢いよく剣を抜いた。しかし、そのはずみで馬の背から放り出された。

しかし、その瞬間、ひときわ大きな流れ星が西の空に落ちて行った。

10・元の世界へ

10・元の世界へ

馬の背から腰が浮いた瞬間、名取の脳裏にはまさしく走馬灯のようにならざるの想い出が駆け巡っていた。

井川と良介、青田は思わず叫んだ。「名取」

甲斐と信濃の国境にいた志田にも大きな流れ星が落ちるのが見えた。巨星が落ちたのだ。これほどの巨星は将門しかない。

「自ら死を選んだか」志田は将門を捕らえて連れてくるように命じていた。自分の兵たちが将門を殺めることはない。ならば、将門が自ら命を落したのだと直感した。

その直後、志田は自分の体が透けて見えるのに気が付いた。考えられることは一つ。歴史が変わろうとしていることで反乱分子が削除されようとしているのだ。しかし、それは元の時代へ戻れるという保証があるわけではない。このまま消えてなくなってしまうのかもしれない。

志田は、それならそれで構わないと思っていた。元の時代では社長とはいえ、親会社から派遣された雇われの身。このところ業績も上がらず、親会社から相当なプレッシャーを受けていた。この時代で三年、やりたいことをやれたのはそんなしがらみがなかったからだ。ただ、他の連中は元の時代へ戻れるよう祈るだけだ。

井川たちの叫び声に知美と今日子は振り向いた。戦場ではこちらが形勢不利のよう見えた。成禎将軍が今にも倒れそうになりながら敵兵を退けている。その傍らで宙に浮く名取の姿が目に入った。その瞬間、大きな流れ星が西の空へ沈んでいった。その光を目

にした途端、同時に意識が遠のいていった。

宙に浮いた名取は地面に激突する瞬間に姿が消えてしまった。突然の出来事に、それを目撃した者は敵も味方も茫然としていた。陣にいた井川達も名取が消えるのと同時に姿を消した。護衛兵たちは廻りを探したが、どこにも見当たらなかった。

その瞬間、志田は一人でいたため、誰の目にも触れることなくその姿を消した。将門絶命の知らせを運んできた通信兵は志田がどこにもいないと部隊長に報告。部隊長はしばらくつむいていたが、顔をあげると笑ってつぶやいた。

「志田様はお帰りになられたに違いない。ここへ来る前におられた平成というところへ…」

シャリーン、シャリーン…。鈴の音が聞こえた。我に返った知美は恐る恐る目を開いた。そこは神田明神の御社殿だった。「夢？」 知美はうつかり転寝をしている間に夢を見たのかと思った。夢にしては妙にリアルで長い夢のような気がした。だが、目の前では意識が無くなる前と同じ巫女が鈴を鳴らしている。

良介は意識が戻った瞬間、隣に座っていた知美と顔を見合わせた。「戻って来たね」 そう言うと、知美が頷いてほほ笑んだ。

良介も半信半疑のまま知美に聞いたのだが、知美のホツとした表情を見て今までのことが決して夢ではなかったのだと確信した。周りを見回すと、他のメンバーもそこにいたので胸をなでおろした。しかし、井川の姿だけがそこにはなかった。

名取と青田は意識が戻ると立ち上がって抱きついた。「やった！ 戻ってきたんだ」 思わずそう叫んだ。その声は静まり返った御社殿に一際響いた。二人は慌てて、その場に座った。

そして、どちらからともなく、頭をどつき合い、そして、笑いながら握手した。

今日子は転寝をしているかのように船をこいでいた。名取達の声でようやく意識が戻ってきた。完全に意識が戻ってきた時にはなぜだか酔っているようだった。そして、隣にいた秋元に呟いた。「私、居眠りしている間に変な夢を見ちゃって、井川部長とお酒を飲んでいたせいかもしれません、目が覚めたらなんだか酔っぱらってるみたいなんですけど」

「なんだそりゃ？　ここ来る前にどつかで飲んできたんじゃないの？　夢で飲んだもんで酔うわけないだろう」　秋元は呆れた表情で今日子を見た。

志田は一つの結論を出していた。今限りで引退しよう。

この鈴の音を聞くのもこれで最後だと思つと、寂しい気もしたが、心の中は満足感に満ち溢れていた。

既に、次の社長を誰に据えるのかも決めている。自分が辞める前までに親会社のお偉いさんとそのあたりの話を付けておかなければならない。

井川は神田明神を尊崇した氏子や崇敬者の先祖を祀る社祖霊社の前に立っていた。

他のメンバーより一足早く意識が戻った井川は、そつと御社殿を抜け出し、ここへやってきた。ここに将門の霊が祀られているわけではないが、共に戦った護衛兵や民たちの子孫が祀られているかもしれないと思ひしばらくそこに立っていた。

「そろそろ参拝が終わる頃だな。あいつら俺の姿が見えないと心配するだろうな」

参拝を終えた良介たちは順路に従って出口へ向かった。　出口手

前でお神酒を頂き外へ出た。

外に出ると、良介、名取、小暮は喫煙場所へ直行した。すると、既に井川が一風しているところだった。

「戻れなかったのかと思いましたよ」 良介が声をかけた。

「お前ら、目が覚めるのが遅いんだよ」 井川はそう言つて、深く吸い込んだ煙草の煙を思いっきり空に向かって吐きだした。 「何日ぶりかなあ、タバコ吸うのは…」

良介と名取も頷きながらタバコの煙を思いっきり空に向かって吐きだした。

井川や志田達が消えた世界は、その瞬間消滅してしまった。消滅したというよりは志田がその時代へやって来る直前まで時間が戻された。 歴史は何何一つ変わることなく現在につながっている。

名取は図書館へ行つて将門の時代の歴史書や文献を読みあさったが、“名取大将”はどこにも出てこなかった。

「結局、夢を見たのと同じですね」 名取はため息をついた。

「あら、そんなこともないかもしれないわよ」 知美が新聞に載せられた小さな記事を指して言った。

そこには、『将門の屋敷があつた場所の近くに祀られている祠から、当時の武将たちが今でいうブレイクダンスのような舞を舞っていたことを裏付ける絵が発見された』とあつた。

「これって…」

「そうね。 この真ん中で踊っているのはきつと名取君じゃないかしら」

名取はその新聞の記事と絵の写真をコピーして家宝にすると行ってその場を去った。

良介と知美は、そんな名取の後姿を微笑みながら見守った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1057q/>

酔いどれ軍団安全祈願でタイムスリップ

2011年7月20日03時30分発行